

## 日本語教育学における現象学的質的研究のポイント －研究内に生じる「ずれ」の分析から－<sup>(1)</sup>

香月 裕介、伊藤 翼斗<sup>(2)</sup>

キーワード：日本語教育学、現象学的質的研究、メタ研究、「ずれ」

### 1. はじめに

日本語教育学においてアクション・リサーチやライフストーリーなどの質的研究法が用いられるようになって久しい。しかしながら、質的研究法の一つである現象学的質的研究については、あまり知られておらず、知見の蓄積もほとんどない。そこで、本研究では、日本語教育において現象学的質的研究を実施する上でのポイントを整理し、提示する。それに先立ち、日本語教育における質的研究の動向を簡単にまとめておきたい。

近年、日本語教育では、質的研究が意図的かつ戦略的に行われるようになってきた。その背景には、日本語教育のフィールドが多様化・複雑化したことがあるという（広瀬，2015）。日本語教育における学習者の国籍、年齢、学習目的、学習環境は、日本における外国語としての英語教育と比べても、多様かつ複雑であることは間違いない。このような日本語教育においては、学習者のありようを丁寧にすくい上げるのに、質的研究が適していたというわけである。

それと同時に、教師研究の潮流の変化によっても、質的研究の受容が進んだ。1990年代以降、日本語教師養成における議論の中心が、「どのような資質・能力が求められるか」から、「(その資質・能力を) いかに育てるか」へと変化していった（金田，2009, p.45）。この流れは、省察し自らを成長させていくという教師像を日本語教育にもたらし、その結果、日本語教育においてアクション・リサーチが盛んに行われるようになった。アクション・リサーチによって個々の日本語教育実践が研究として発表されるようになったことが、日本語教育における質的研究の間口を広げたと言ってもよいだろう。その後、2000年代に入ると、エスノグラフィー的な切り口で実践を記述する論考が増えていく（市嶋他，2014）。さらに2010年ごろから、教師の語りから教師のライフ、教師の実践を描き出そうとする研究が見られるようになっていった。ライフストーリー研究やTEA（複線経路等至性アプローチ）による研究などがそれであり、近年これらを用いた研究成果が蓄積されている。

本研究で取り上げる現象学的質的研究も、教師の語りから教師の実践を描き出す研究の一つであると言える。現象学的質的研究は、「われわれの経験や実践に埋もれていて捉えがたいこと、そのはっきり自覚できていない、あるいは見えていないことを、見えるようにする」（西村，2013, p.133）ことを得意とする研究手法である。教師の実践には、ふだん自覚

できていない、意識できていないような実践の知がさまざまに埋め込まれている。ショーン（1983/2007）が「〈実践の中の知の生成〉が暗黙的で無意識的になっていくにつれて、実践者は現在おこなっていることについて考える大事な機会を見失ってしまうようになる」（p.63）と指摘しているように、教師の実践の暗黙的で無意識的な部分を見えるようにすることで、実践をより深く理解することができる。したがって、日本語教育、とりわけ日本語教師を対象とした研究において、現象学的質的研究は有用な手法であると言える。

しかしながら、ライフストーリーや TEA に比べると、日本語教育における現象学的質的研究の研究成果はわずかであり、日本語教育における現象学的質的研究は、緒に就いたばかりだと言える。今後の広がりや展開が期待されるが、そのためには、何らかの指針が必要だろう。なぜなら、後述するように、現象学的質的研究は、先だって定められる分析の手続きを持たず、また、分析の視点を支える現象学という哲学的思想も、理解が容易であるとはとても言えないからである。端的に言えば、現象学的質的研究は“とっつきにくい”研究手法なのである。そして何より、日本語教育の研究フィールドにおいて、船出を始めたばかりの現象学的質的研究は、圧倒的に知られていない。そのため、現象学的質的研究の認知度を上げることも必要である。

そこで、本研究では、日本語教育における現象学的質的研究の嚆矢である『日本語教師の省察的实践－語りの現象学的分析とその記述を読む経験』（香月、2022）を取り上げ、その記述内容を分析する。したがって、本研究は、研究を研究する、メタ研究の位置づけである。具体的には、この香月（2022）における研究のプロセスとその記述が、現象学的質的研究のパラダイムと一貫したものであるかを検討する。そして、一貫性が損なわれている箇所、すなわち「ずれ」が見られる箇所を取り上げ、その「ずれ」の要因と合わせて示すことで、現象学的質的研究を行う際にどのようなことに気をつけるべきか、そのポイントを提示することを試みる。

## 2. 現象学と現象学的質的研究

本研究は、現象学的質的研究を研究手法とする香月（2022）を分析対象としていること、そして、現象学的質的研究を普及させるために必要な知見を得ることを目的としていることから、ここでは現象学的質的研究がどのようなものであるのか詳しく説明しておきたい。現象学的質的研究はその名のとおりに現象学に出自を持つ研究アプローチであるため、2.1 では現象学について概観し、2.2 で現象学的質的研究について見ていく。

### 2.1 現象学

現象学はフッサールが提唱した哲学の一潮流である。デカルト以降、現代に至るまで、客観的世界の存在とそれを認識する私（理性）という二元論はそのまま自然科学の枠組みとして位置づけられてきた。そして自然科学は、私が排除された客観的世界を探求する方向へと

発展した。このことによって現代まで科学技術が発展してきたことは疑いのないことではあるが、この客観化をフッサール（1936/1995）は批判した。なぜなら、露木（2022）が「数ですべてが表現でき、数式と規則性ですべてを測ることができるという妄信から、人が生きる意味や働くことの意味さえ、すべて自然科学に委ねてしま」い、「人が生きる意味や働くことの意味が見失われていく」（p.70）と説明するように、客観化されたものが我々の経験から乖離してしまい、主観的であいまいな部分は無視されてしまうからである。

客観化を前提とした世界の把握とは異なり、フッサールは、私が経験した事象を経験しているそのままの形で記述することによって事象の内側から理解しようとした。例えば、私が何か書き物をしているとき、客観的世界を想定して書くというあり方を記述しようとするならば、[私] という人物が [ペン] という物体を [持つ] という動作を継続しながら [紙] という物体に [書く] という動作をしているということになるだろう。しかし、私の経験をそのままの形で探索するのであれば、そもそも [私] [ペン] [紙] [持つ] [書く] という各項目を分離して捉えるのではなく、一体となったあり方で書くという経験が成り立っていることを分析の出発点とすることになる。フッサールは、前者のように自然を客体化してみる「自然主義的態度」と、後者のような我々の経験そのままの「自然的態度」を区別し、自然的態度によって生きられる世界を「生活世界」と呼んだ（フッサール、1936/1995, p.223）。そして、我々が持っている先入見を一旦「判断停止（エポケー）」することで事象をそのままの形で探求することができると考えた。以上のように、「我々がそれを生きるそのままの仕方で、我々が生きる経験的な意味を記述すること」（ヴァン・マールネン、1997/2011, p.31）が現象学なのである。そうすることによって、過度に客観化してしまっただけは零れ落ちてしまう経験の細部を掘り起こし、「それらの間の連関を明らかにすることによって、背後でそれらを支える運動や構造を取り出す」（松葉、2014, p.13）のである。

フッサール以後、現象学を実存主義的・解釈学的に展開したハイデガー、ハイデガーの議論に影響を受ける形で独自の実存主義を生み出したサルトル、フッサールがあまり触れてこなかった知覚や身体について思索を深めたメルロ＝ポンティ、フッサールやハイデガーの議論を他者論へと磨き上げたレヴィナスなどによって、現象学は様々な発展を遂げることとなった。このように、フッサールが提唱し、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、サルトル、レヴィナスらによる現象学の展開は、後に質的研究の文脈へと繋がる重要な流れとなる（田中、2018）。

## 2.2 現象学的質的研究

このように発展してきた現象学は、心理学、社会学、教育学など様々な領域で実践を質的に記述するアプローチとして取り入れられるようになった。本稿では、このアプローチを現象学的質的研究<sup>(3)</sup>と呼ぶ。特に現象学のアプローチが強く受容されたのは看護学の領域である。医療の現場においてはエビデンスに基づく診断や治療が優先され、しばしば看護師や患

者の気持ち、経験が軽視される状況にあり、患者に寄り添うケアを実践することが難しかった。そこでエビデンスを重視する研究では零れ落ちてしまいがちな看護師や患者の気持ち、経験を質的に研究する機運が高まり、当事者の経験をそのままの仕方ですべて記述する現象学がそのアプローチとしてベナー&ルーベル（1989/1999）などによって採用されるようになった。その後、日本においては西村（2001, 2014, 2016 など）や村上（2013, 2016, 2018, 2021 など）など様々な研究者によって現象学的質的研究の方法論が磨き上げられていくこととなった。

現象学的質的研究では、参与観察やインタビューで得られた言語的なデータを分析対象とすることが多い。得られたデータをどのように分析していくかは、分析に先立って決められるものではなく、データと向かい合う中で自ずと決まってくる。ただし、多くの研究者によって着目される観点がある。それが村上（2013）で挙げられているモチーフ、シグナル、ノイズである。モチーフとは、通常の用法から外れた特徴的な言い回しや印象に残る単語など、データを繰り返し読む中で際立ってくる要素である。シグナルは、それ自体ははっきりとした意味を持たないが目立つ単語である。最後のノイズは、主語と述語の不一致、言い間違い、言い淀み、沈黙、繰り返し、方言、話題の跳躍や脈絡のなさ、独特な主語、語りのトーンの変化など、一見すると話題の内容とは関係がない細部のことである。村上（2013）は、このモチーフ、シグナル、ノイズに注意し、時間、空間、身体、言語、制度といった基本的なカテゴリーを指針に、その場で起きている事象を貫く大きな流れをつかもうとすることが、すべてのデータで有効とは言わないまでも、手引きにはなると述べている（pp.355-356）。

村上（2021）は、自身の行うアプローチを現象学的な質的研究と呼び、それを省略してPQR（Phenomenological Qualitative Research）と称している。PQRは「変化していく経験や実践の構造をそのダイナミズムの内側から記述することを目的とする」（p.220）もので、「たとえば知覚一般の本質構造といったような認知機能の「本質」を扱うわけではない。そうではなく初期ハイデガーが事実性と呼んだような、一回限りの生の意味を問う、つまり経験の質的な側面に関わる」（p.221）と述べている。このように、現象学的質的研究は本質ではなく、経験の質的な側面を記述することを目指すアプローチであると言える。このような目的で描き出された記述は読む人を「触発」（村上, 2016, 2021）する。村上（2021）は「統計に基づく一般観念は「知識」をもたらすが、直接読者個人の生を突き動かすことはない。読者が心を動かされるのは、それが感動によるにせよ嫌悪によるにせよ、具体的で個別的な事例だからである。個別的で具体的なものから導き出されるひとつの真理は〈触発する真理〉と呼べる」（p.238）とし、読み手がいかにこの真理から触発されるかについて二つのあり方を示している（p.239）。一つは、読み手が「事象や他者の経験を、その運動の内部から自ずと感じ取る」（p.239）というあり方である。もう一つは、読み手が「感情移入や同情を引き起こすわけではなくても、他者の経験を自分の可能性の拡張として生き直す」（p.239）というあり方である。このような二つのあり方で読み手が触発されることによっ

て、「読み手にとっての意味をもった経験となり、読み手の経験も更新され、新たな意味や視点を与える。個別の経験の記述には、このような知の循環が期待される」（西村，2017，p.42）のである。

### 3. 分析方法

本稿で分析対象としたのは香月（2022）である。この書籍は、二人の日本語教師（星野さん、足立さん）の語りを現象学的質的研究のアプローチによって分析し、日本語教師の実践がどのように成り立っているのか、無意識のレベルの実践における知はどのようなものかを記述したものである。現象学的質的研究のアプローチの中でも、香月（2022）は解釈学的現象学に依拠した記述を行っている。解釈学的現象学とは、個人の経験が依拠する運動や構造に関する記述は、全ての人に共通する普遍的な本質として見なされるわけではなく、研究者の解釈によって達成されるという立場のことである。解釈学的現象学はハイデガーやガダマーらの影響によって生まれたものであり、研究者の視点も分析に組み込む。そのように描出した実践の記述を星野さんと足立さんの両名に読んでもらい、読んだ直後の語り、そして読んでから一年後の語りを得て分析することで、「実践の記述を読む」という経験がどのように日本語教師の省察につながるのかについても示している。

本書を選んだ理由は、本書が日本語教育の領域で現象学的質的研究をアプローチとして採用している数少ない書籍であり、また、本稿の著者の一人が執筆していることから、記述の意図まで分析に含めることが可能となるためである。

分析と考察は以下のような手順で行った。

まず、本稿の筆者ら二人が各自で分析対象の書籍を読み、香月（2022）に記載されているパラダイムや研究方法から見たときに、実際に行われたデータ収集、分析、記述のあり方、考察に「ずれ」が生じていると思われる箇所をピックアップした。なお、本稿における「ずれ」とは、論文内で「一貫性が損なわれた箇所」（香月他，2021a）のことである。

次に、各自が「ずれ」としてピックアップした箇所が本当に論文の一貫性が原因によるものなのか判断するために、各自がピックアップした「ずれ」が生じていると思われる箇所を筆者らで共有し、どのような意味で「ずれ」と言えるのかを検討した。そして、各自がピックアップしたものから「ずれ」とは言えない箇所を除外することで、「ずれ」が生じている箇所を確定した。

最後に、「ずれ」が生じている箇所について、「ずれ」の要因を書籍内の記述、あるいは著者である香月の省察をもとに考察した。

### 4. 分析と考察

分析によって確認できた「ずれ」は、主に次の三か所に見られた。

#### （1）研究協力者のサンプリング

(2) 記述の方法

(3) 分析の内容

以下、4.1で(1)の「ずれ」について、4.2で(2)の「ずれ」について、4.3で(3)の「ずれ」について、実際の記述を示しながら述べる。

#### 4.1 研究協力者のサンプリングにおける「ずれ」

研究協力者のサンプリングについては、香月（2022）の第5章（5.1.1）に記述がある。香月（2022）では、次のような記述で、研究協力者に星野さんと足立さんの二名を選んだサンプリング方法とその理由を説明している。

本書では、この中で③多様性最大化のサンプリングを採用している。（中略）本書においては、「10年以上の日本語教育の経験がある日本語教師」ということを基盤に、その中で可能な限り異なる属性を持った研究協力者を選んだ。具体的には、性別、教育歴、現在の雇用形態、現在勤めている教育機関に関して多様性を持たせた。

（pp.106-107, 下線は本稿筆者）

この記述は、二つの点において、現象学的質的研究との「ずれ」が見られる。

一つ目は、サンプリング方法として、「多様性最大化のサンプリング」を採用している点である。香月（2022）においても説明されているとおり、多様性最大化のサンプリングとは、「サンプル内で、最大の多様性を目指す。少数の、しかしできるだけ多様な事例を取り入れて、フィールドに含まれる多様性の幅や相違点を明らかにしようとする」（フリック, 2007/2011, p.149）ものである。このことから、多様性最大化のサンプリングは、フィールド全体の様相を広く捉えようとする際に有用なものであると考えられる。しかし、現象学的質的研究が目的とするのは、先述のとおり「変化していく経験や実践の構造をそのダイナミズムの内側から記述すること」（村上, 2021, p.220）であり、その視点は経験や実践の個別性・一回性を重視している。そうであるなら、現象学的質的研究においては、多様性最大化のサンプリングを志向する必要はない。これが、「ずれ」の一つ目である。

二つ目は、星野さんと足立さんが「異なる属性を持っている」という前提を以てサンプリングすること自体が、著者自身の先入見を強化するおそれがある点である。経験や実践の個別性・一回性を重視する現象学的質的研究において、研究協力者の経験や実践が異なることは言うまでもないことである。しかし、分析に先立って、両者の異なりが性別や教育歴、現在の雇用形態、現在勤めている機関といった属性の異なりに矮小化・歪曲化されるべきではないし、星野さんが「非常勤講師である」という事実を足立さんとの異なりから理解したり、足立さんが「男性である」という事実を星野さんとの異なりから理解したりするのは、現象学的質的研究においては妥当な視点であるとは言えない。その意味で、サンプリングの

時点で、両者の異なりを殊更に強調する必要はないと考えられる。これが「ずれ」の二つ目である。

では、なぜ、香月（2022）では多様性最大化のサンプリングがなされたのだろうか。著者である香月自身の省察によれば、その理由は、「学位論文のレフェリーを納得させるため」ということであった。香月（2022）は、その内容の大部分を、博士論文を基にしている。そのため、この研究の成立には、「学位論文として認められる」ということが不可欠の条件であった。そのような背景を持つこの研究において、香月自身の本来のサンプリングの経緯を率直に示すなら、それは、「星野さんの経験・実践が聞きたいから」「足立さんの経験・実践が聞きたいから」ということに尽きる。しかし、こうした「この人がよかったから」というサンプリングは、一般的な研究においては曖昧に過ぎるだろうと考えた。「学位論文として」求められるサンプリングのあり方を思案した結果、香月は多様性最大化のサンプリングに当てはめて、星野さんと足立さんを選んだ妥当性を示そうとしたのである。

現象学的質的研究においては、リサーチクエスションに該当し、研究者が「この人の経験・実践を記述して、広く共有したい」と思えるのであれば、それを以てサンプリングとしてよいものだと考えられる。一方で、「なぜこの人を選ぶのか」という理由を、説得力を以て示すことが同時に求められる。研究協力者のサンプリングに関して、香月他（2021a）がケース・スタディを研究手法とした他の文献を対象に同様の分析を行った結果、同じような「ずれ」があったことが指摘されている。質的研究における研究協力者のサンプリングは、研究手法の選択と密接に関連するため、「ずれ」がなく一貫しているかどうかを入念に検討する必要があるということだろう。

## 4.2 記述の方法における「ずれ」

記述の方法については、香月（2022）の第5章（5.2.2）に記述がある。また、実際の記述は、第6章～第10章においてなされている。以下、4.2.1では、研究者自身の記述方法に関する「ずれ」を取り上げる。4.2.2では、インタビューのデータを引用する際の記述方法に関する「ずれ」を取り上げる。

### 4.2.1 研究者自身の記述方法に関する「ずれ」

香月（2022）において、インタビューを文字化したデータは次のように示されている。ここでは、第5章に文字化の例として示されているものの一部を引用する。

【足立さんへのインタビュー：1回目】

香月    お願いします。

足立    お願いします。

香月    じゃあ、もうかなり長いキャリアはあると思うんですが、その中で、印象的な出来事、日本語を教えていて、忘れられないこととか、すごく印象に残っている出来事。

(p.110)

ここで、インタビュアーは「香月」という名前で示されている。この記述方法について、香月は「インタビューのときと分析の時では、「私」の位置づけは変わる」(p.119)という記述を引き、このことが理由であると省察している。つまり、インタビューをしていたときの「私」は、文字化データをもとに分析・記述している時点の「私」とは異なるため、そのことを示すために、「私」ではなく「香月」としているのだという。

しかしながら、第6章以降の分析において、研究者の語りが引用されている箇所の記述を見てみると、その区別が一貫されていないことが分かる。以下は、第6章における記述である。

〔大学と語学学校だと、なんか変わります?〕(465)という私からの問いかけに対して、星野さんは〔やっぱ人数が違う〕(467)、〔やっぱ一対一となんかクラスで教えるから〕(467-468)ということ挙げた。

(p.134, 下線は本稿筆者)

ここで現れた「分かる」という言葉は、〔いまみんな興味を失っているなっていうのが分かる。すごい分かる〕(885)と星野さん自身によって繰り返され、その後、星野さんと私の語りで何度も用いられることになった。星野さんと私が学生の様子を語り合い、それを理解するという経験を語るのには、「分かる」という言葉が最も馴染んだということである。

(p.152, 下線は本稿筆者)

これらの部分の記述における「私」は、どちらもインタビュー時点の「私」である。先に述べたように、もしインタビュー時点の「私」を分析時点の「私」と区別するのであれば、これらの部分においても、「香月からの問いかけに対して」「香月は～を星野さんに聞いた」と記述するのが妥当だっただろう。この点に、「ずれ」が生じている。このような「ずれ」が起きる要因には、研究者の香月自身が「インタビューのときと分析の時では、「私」の位置づけは変わる」(p.119)と書きながら、それを十分に身体に落とし込んで分析できていないことが挙げられる。研究者本人が、この区別に馴染めていないということである。

インタビュー時点の「私」と分析時点の「私」の区別が曖昧になっていることは、他の記



述からも窺える。

足立さんは、〔戸惑いはやっぱり、厳しい〕(416)と「戸惑い」を「厳しい」に言い換え、〔いろんな意味で厳しい、日本で働くって〕(420)と語った。そして、先ほどまでの語りと同様に、インドネシアと今を対比的に語り、ここでも両者は〔全然違う〕(425)と意味づけられる。【中略】そして、〔仕事の量が違う。授業のレベルや教える幅も違う。考え方も違う〕(437-438)と「違う」ことが強調され、〔やっぱり日本で働くほうが大変〕(438-439)と語りは続く。

(p.218, 下線は本稿筆者)

「足立さんは、～と語った。」という記述では、インタビュー時点の出来事を現在の分析時点からさかのぼる形で見ており、分析時点の「私」が反映されていると言える。一方、続く「ここでも～と意味づけられる。」「そして、～と語りは続く。」という記述は、インタビュー時点に立って記述がなされており、これは、インタビュー時点の「私」が反映されていると言える。「意味づけられる。」「語りは続く。」という書き方にすることで、記述されたやり取りに臨場感が生まれ、読み手を惹きこむ力が生じると考えることもできる。しかし、インタビュー時点の「私」と分析時点の「私」を区別するという前提に立つなら、やはり「意味づけられた。」「語りは続いた。」と記述しなければならないだろう。

このような研究者内での視点の曖昧さに起因する「ずれ」は、ケース・スタディにおいても見られた(香月他, 2021a)。そのため、現象学的質的研究に限らず、「ずれ」が生じやすい部分であるとも考えられる。

#### 4.2.2 インタビューのデータを引用する際の記述方法に関する「ずれ」

インタビューによって語りを得るという行為について、香月(2022)では、次のように説明している。

インタビューにおいて生まれる語りを、星野さん、足立さんと私が相互に構築したものであると捉えるならば、星野さんと足立さんの語ったことは、聞き手である私の影響なしには記述できないことになる。

(p.111, 下線は本稿筆者)

インタビューにおける語りは相互構築されたものであるということは、聞き手である香月が何を言ったか、どのように反応したかということが語りにおいて重要な役割を果たしているということである。そうであるなら、香月が何を言ったか、どのように反応したかということは、データを引用して示す際に欠かせない情報だということになる。

しかしながら、実際に分析においてなされている引用を見てみると、それが示されていない

い場合が少なくない。以下に、星野さんの語りの引用を例として挙げる。

【星野さんへのインタビュー：1回目】

星野 クラスの中に例えば、一人、すごく反応のいい子みたいな、そういう子がいると、なんていうかな、他の子もしゃべりやすくなる、とか、発言してない子でも参加しているような空気が出てくるよね、なんかうんうんとうなずいてたりとかでもなんか、そう、じゃない時にシーンとこうふっても何も返ってこない時とかはサーってなる（笑い）、みたいな感じと、うん。なんか一人の役割で、一人がいるかいないで全然違うやなっている時もあるよね。

(p.132)

香月（2022）では、この5行にわたる星野さんの発話が引用されているのみである。しかし、先ほど述べたように、語りは相互構築されたものであるという立場に立ち、「私の影響なしには記述できない」というのであれば、前後に私が何を語っているのかも示されるべきであろう。

ここで、分析を記述する際に参照していた、元の文字化データを見てみよう。星野さんの実際の語りは、「クラスの中に例えば」と話し出す前に、「なるほどね、うーん、ほんまやね、でもさそれも関連あるかちょっと分からないけど」と話しており、直前の話の関連として、クラスの例を出していた。そして、その直前の話とは、香月が語った「怒った後に学生がシュンとした空気になり、それがクラス全体に広がると、空気を変えるのが難しい」という経験であった。その経験の語りを受けて、星野さんは自身の経験を例として話した。そして、星野さんの話に対して、私は「うん、確かに。」と同意を示していた。この一連のやり取りを、星野さんの5行の語りのみの引用で示してしまうと、かなりの情報が欠落してしまうことになるだろう。香月が経験を語ったこと、そして星野さんの語りに同意したことまで含めて引用し、分析をすることで、その記述はより豊かなものになった可能性がある。

一方で、一回が一時間を超えるインタビューにおいて語りは連綿と続いている。では、この語りを「どこから」「どこまで」引用するのが適切なのだろうか。メリアム（1998/2004）は、ケース・スタディにおいて起こりうる問題の一つとして、「時間をかけたケース・スタディが価値あるものだと考えられていることもあり、調査結果は、多忙な政策決定者や教育者が読んで活用するには、量が多すぎたり、詳しすぎたり、深入りしすぎていたりすることがある」（p.61）と指摘しており、分厚い記述による調査結果は、理解・活用の際に負担が大きくなっていくことへの懸念を示している。このことは、現象学的質的研究、ひいては豊富な語りとそれに基づく分厚い記述を扱う質的研究全般に当てはまるだろう。語りをどの程度引用するかの適切さは、現実的な制約との兼ね合いによって判断されるものだと考えられる。

### 4.3 分析の内容における「ずれ」

前節では、第6章～第10章における記述の方法における「ずれ」を示した。本節では、分析の内容に着目して「ずれ」を見ていく。4.3.1では、研究者自身の視点に関する「ずれ」を取り上げる。4.3.2では、分析の観点に関する「ずれ」を取り上げる。

#### 4.3.1 研究者自身の視点に関する「ずれ」

4.2.1で述べたように、同じ研究者ではあるものの、分析する人間としての「私」は、インタビューを行う人間としての「私」とは区別される。これは、研究者が「経験的な水準から、いわば超越論的な水準へと移行」（村上 2013, pp.359-360）するということである。香月（2022）では、この村上（2013）の指摘を踏まえ、分析における研究者自身の視点について説明している。

この「超越論的な水準への移行」をどのように捉えるかどうかは、フッサールの理解する（研究者の主観は完全に排される）か、ハイデガーやメルロ＝ポンティに拠って立つ（研究者の主観を完全に排することは不可能である）かによって、解釈が分かれるだろう。本書は、後者の立場に依拠するため、分析を行う研究者の視点を前提に、それを含みいれるかたちで分析を行う。

（p.119、下線は本稿筆者）

3章で述べたとおり、香月（2022）は、ハイデガーの解釈学的現象学に依拠した分析を行っている。それはつまり、「[「研究者（分析者）がどのように解釈しているか」という点も意識することで研究者の視点も分析に組み込んでいる」（p.66）ということである。実際に、研究者の視点が分析に組み込まれている箇所は本文中にいくつもあるが、以下にその例を一つ挙げる。

#### 【星野さんへのインタビュー：3回目】

星野 雰囲気が悪くなるのが嫌だなと思ったら、もしかしたら、ちょっと許容してたりしてたのかな。

香月 あー、それがなんかこう、変化していききました？

（本文一部省略）

星野さんは、今改めて前年度の実践を省みることで、そのときの自身の実践を「ちょっと萎縮してた」「ちょっと許容してたりしてた」と感じられたのである。そのことは、「去年」と「今」と明確に言葉にして対比することによって浮かび上がってくる。しかし、「ちょっと」「してたりしてたのかな」といった迂言的な表現からは、星野さんは自身の前年度の実践を明確には意味づけられていないことが窺える。

この「去年」から「今」に至るまでの変化に関心を持ち、私は「学習者との最初の出会いからの

変化」を星野さんに聞いた。

(p.152, 下線は本稿筆者)

ここでは、調査者である香月が「あー、それがなんかこう、変化していききました？」と聞いたことの背景には「調査者がその変化に対する関心を持っていた」という分析者の視点がある。

一方、このような研究者の視点が反映されていない分析も見られた。

この注意は、最終的に「だいたい」という表現によって、「みんな気づいてる」ことがおおそ担保されたものとして星野さんの中で成立する。それまでは「たぶんみんな気づいてる」(78)ものだった注意が、その経験を語るうちに、「だいたいみんな気づいてる」(146)ものとなった。星野さんにとっての「みんな気づいてる」経験において、「たぶん」から「だいたい」へと確実性が変化していることが分かる。

(p.139, 下線は本稿筆者)

授業で個別に学生を注意したという実践について、当初、星野さんは「(学生は) たぶんみんな気づいてる」と語っていたものが、語りが進む中で「(学生は) だいたいみんな気づいてる」と語りが変化した、という分析である。その変化について、この分析では、「その経験を語るうちに」と、星野さんの行為の結果として説明されている。しかし、星野さんが「その経験を語るうちに」は、私の応答も多く含まれていたことが見逃されている。星野さんがこの経験を語っているとき、私は「なるほど。」「ふんふんふん。」と数回にわたって同意を繰り返していた。さらに、星野さんは私の同意に対して「うん。」「そうそうそう。」と同意を重ねた。このように、私と星野さんが同意し合い、共通理解を得たことは、星野さんが自身の経験により確実性を持たせて「だいたい」と言語化することを支えていると言えるだろう。分析においてこの点を見落としているのは、分析の際に、調査者としての「私」を、分析者としての「私」の視点から（つまり、「超越論的な水準」に移行して）まなざすことが十分にできていないためであろう。これは、分析者としての視点を保ち続けることができない未熟さによって生じる「ずれ」である。インタビュー時点の「私」と分析における「私」を区別するというパラダイムは、一朝一夕で身体化できるものではない。

#### 4.3.2 分析の観点に関する「ずれ」

第7章において、足立さんの語りを、「やっぱり」という語を取り上げて分析した箇所がある。

ここで、足立さんは「やっぱり」という語を頻出させて語っている\*。インドネシアと日本では

求められる質が異なるということを、足立さんはかなり明確なものとして、そして、聞き手である私にも共有されるものとして意味づけている。

(p.211, 下線は本稿筆者)

これは、村上（2013）の言う「シグナル」（それ自体ははっきりとした意味を持たないが目立つ単語）に着目した分析であり、分析の妥当性にはさして問題はないと思われる。しかしながら、上記本文中の「\*」で示した箇所に添えられた章末注を見てみると、次のような記述がなされている。

足立さんは、もともと「やっぱり」という語をよく口にしており、口癖の一つであるとも考えられるが、ここでの出現回数は際立って多い。

(p.239, 下線は本稿筆者)

この注は、何のために記されたものだろうか。「口癖の一つであるとも考えられるが」というのは、「ここではおそらく口癖ではないと考えられる、だから分析の対象としている」という意味に感じられる。言い換えれば、そこには「口癖であれば、分析からは排除する必要がある」という先入見があるように思われる。しかしながら、口癖はデータにとって邪魔な存在であり、排除すべきであるというのは、ともすれば主観的であいまいな部分を除外してきた自然科学と同じ立場であるだろう。現象学的質的研究は、むしろ、そのような零れ落ちてしまう細部も分析に組み込むものであったはずである。したがって、こうしたエクスキューズを挿し入れることには、現象学的質的研究の姿勢との「ずれ」があると言わざるを得ない。口癖であれば分析しないのではなく、口癖だからこそ分析するというのが、現象学的質的研究における適切な姿勢だろう。

## 5. まとめ

本稿では、日本語教育における現象学的質的研究のポイントを整理し、提示することを目的として、香月（2022）における「ずれ」が見られる箇所とその要因を分析した。そして、分析によって確認できた「ずれ」を、(1) 研究協力者のサンプリング、(2) 記述の方法、(3) 分析の内容の三点に整理して示した。

本稿で「ずれ」として挙げられたものを回避するためには、研究手法としての現象学的質的研究のパラダイムを深く理解することが必要である。本稿でその理解のポイントを整理し、提示したことが、現象学的質的研究の理解の助けとなること、そして、今後、日本語教育において現象学的質的研究に取り組む際の一つのメルクマールとなることを願っている。

一方で、今回の分析によって見えてきた「ずれ」を項目として取り上げてみると、「研究協力者のサンプリング」「研究者自身の記述方法」「インタビューのデータを引用する際の記

述方法」「研究者自身の視点」「分析の観点」であった。これらの項目は、現象学的質的研究に限らず、他の質的研究手法でも同様に留意すべきものであると言える。質的研究全体において留意すべき事項をまとめることを目指して、今後もさまざまな研究手法を扱った論考を対象とした「ずれ」の分析を進めていきたい。

付記：本研究は、日本学術振興会 基盤研究（C）22K00652「日本語教育学における質的研究プラットフォーム構築のための基礎研究」（研究代表者：香月裕介）の助成を受けたものである。

#### 〔注〕

- (1) 本稿は、2021 年度日本語教育学会秋季大会（オンライン、2021 年 11 月 27 日）パネルセッションで発表した香月他（2021b）を土台としている。香月他（2021b）では、香月の博士論文（香月、2019）における「ずれ」を分析した。本稿では、香月（2019）を加筆・修正し書籍化した香月（2022）を改めて分析し、大幅に内容を改変した。
- (2) 本稿の執筆は、香月が 1、4、5 章、伊藤が 2、3 章を担当した。なお、本文中にも記載したとおり、本稿の分析は執筆者二名の共同作業によって行われている。
- (3) 本稿において「現象学的質的研究」と呼ぶ研究アプローチは、村上（2021）では現象学的な質的研究という語が、香月（2022）では現象学的分析という語がそれぞれ用いられているように、まだ特定の用語が定まっているわけではない。本稿では、暫定的に、現象学的質的研究という語で統一した。

#### 〔参考文献〕

- 市嶋典子・牛窪隆太・村上まさみ・高橋聡（2014）「実践研究はどのように考えられてきたか」細川英雄・三代純平編（2014）『実践研究は何をめざすか－日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版 pp.23-48.
- ヴァン＝マナーン、M.（2011）『生きられた経験の探求－人間科学がひらく感受性豊かな〈教育〉の世界』ゆみる出版。（van Manen, M.（1997）. *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*.（2<sup>nd</sup> Edition.）The University of Western Ontario.）
- 香月裕介（2019）「日本語教師の省察的実践モデルの構築－語りの現象学的分析の試みから」大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文.
- 香月裕介（2022）『日本語教師の省察的実践－語りの現象学的分析とその記述を読む経験』春風社.
- 香月裕介・伊藤翼斗・大河内瞳（2021a）「論文内に生じる「ずれ」とその要因－ケース・スタディを用いたある研究の分析」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第 6 号 pp.25-38.
- 香月裕介・伊藤翼斗・大河内瞳（2021b）「質的研究を研究する－日本語教育学における質的研究の体系的枠組みの構築を目指して」『2021 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』p.22-31.
- 金田智子（2009）「日本語教師の成長および成長支援のあり方－「成長」にかかわる調査研究の推進を目指して」河野俊之・金田智子編（2009）『日本語教育の過去・現在・未来 第 2 巻 教師』凡人社 pp.42-63.
- 田中彰吾（2018）「現象学」能智正博編（2018）『質の心理学辞典』新曜社 pp.97-98.

- シヨーン, D. A. (2007) 柳沢昌一・三輪健二 (訳) 『省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房. (Schön, D. A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. New York: Basic Books.)
- 露木恵美子 (2022) 山口一郎 (監修) 『共に働くことの意味を問い直すー職場の現象学入門』 白桃書房.
- 西村ユミ (2001) 『語りかける身体ー看護ケアの現象学』 ゆみる出版.
- 西村ユミ (2013) 「現象学的な理論とその展開」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也編 (2013) 『質的心理学ハンドブック』新曜社 pp.115-135.
- 西村ユミ (2014) 『看護師たちの現象学ー協働実践の現場から』 青土社.
- 西村ユミ (2016) 『看護実践の語りー言葉にならない営みを言葉にする』 新曜社.
- 西村ユミ (2017) 「ケアの実践を記述すること／自らの視点に立ち帰ること」西村ユミ・榊原哲也 (編著) 『ケアの実践とは何かー現象学からの質的研究アプローチ』 ナカニシヤ出版 pp.22-44.
- 広瀬和佳子 (2015) 「「実践研究」から考える質的研究の意義ー言語観・教育観・研究観のズレを可視化する議論のために」 館岡洋子編 (2015) 『日本語教育のための質的研究入門ー学習・教師・教室をいかに描くか』 ココ出版 pp.49-70.
- フッサール, E. (1995) 細谷恒夫・木田元 (訳) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 中央公論新社. (Husserl, E. (1936). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*. Beograd: Sonderabdruck aus "Philosophia".)
- フリック, U. (2011) 小田博志 (監訳) 『新版質的研究入門ー〈人間の科学〉のための方法論』 春秋社. (Flick, U. (2007). *Qualitative sozialforschung: Eine Einführung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag GmbH.)
- ベナー, P. & ルーベル, J. (1999) 難波卓志 (訳) 『現象学的人間論と看護』 医学書院. (Benner, P. & Wrubel, J. (1989). *The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness*. Addison Wesley, Menlo Park.)
- 松葉祥一 (2014) 「現象学とは何か」 松葉祥一・西村ユミ編 (2014) 『現象学的看護研究ー理論と分析の実際』 医学書院 pp.8-16.
- 村上靖彦 (2013) 『搞便とお花見ー看護の語りの現象学』 医学書院.
- 村上靖彦 (2016) 『仙人と妄想デートするー看護の現象学と自由の哲学』 人文書院.
- 村上靖彦 (2018) 『在宅無限大ー訪問看護師がみた生と死』 医学書院.
- 村上靖彦 (2021) 『交わらないリズムー出会いとすれ違いの現象学』 青土社.
- メリアム, S. B. (2004) 堀薫夫・久保真人・成島美弥 (訳) 『質的調査法入門ー教育における調査法とケース・スタディー』 ミネルヴァ書房. (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative Research and Case Study Application in Education*. (Revised) San Francisco, C. A.: John Wiley & Sons, Inc.)